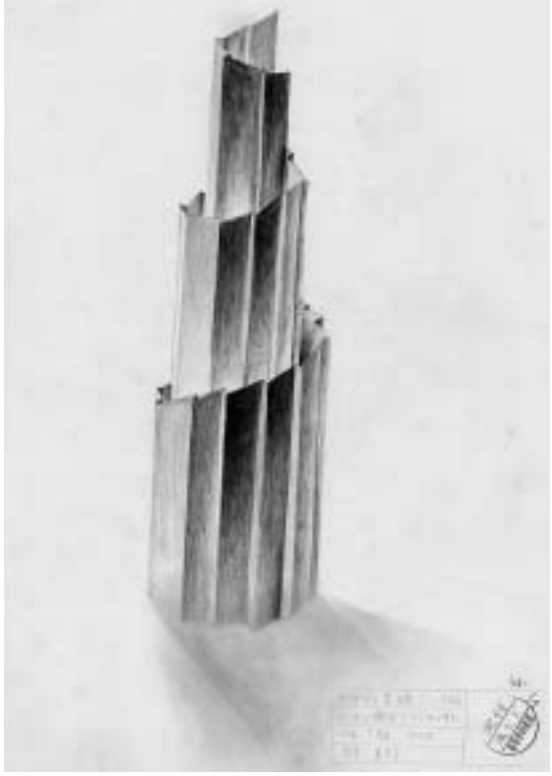
木村　明博



林　美予子

デザイン基礎Ⅰ

第２課題
立体の構成・表現

１年１組

担当：
柳田　武
小石川　正男
上利　益弘
前田　光一

木村　明博

三本の柱を使って一つの世界を表現するには、どんな工夫が必要なのか。いろいろと考えてみましたが、うまくいきませんでした。そんな時、先生から「今にも動き出しそうな、見ていて楽しくなるようなものを」というアドバイスをいただき、イメージを固めていきました。
それぞれ違う個性の物体が寄り添って一つの空間ができる、というのがこの作品のテーマですが、これを常に意識していると、次々と新しいアイデアが浮かんできて、楽しく創作することができました。

指導＝上利　益弘

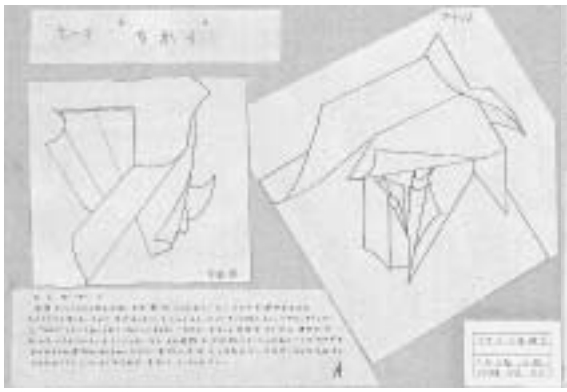
本課題は「立体をつくる」に続くもので、デッサンによって「立体」のデザイン意図を２次元で効果的に表現するものであった。学生諸氏がその技法において不慣れなこともあって、総体的にすぐれた作品を見いだすまでには至らなかった。
この作品は、特に前回の「立体をつくる」にて極めて高く評価されたものである。立体に挑む建築家としての修行の第一歩としてそこに私が評価したことは、第一に氏の課題に対する真摯な取り組みの姿勢であり、これまで学んできた基礎的な形態を巧みに活用しながら、柔軟にそれをのりこえ素材の持つ質感をうまく引き出し、動的な印象の中に静的な緊張感をそなえた不思議で独創性のある作品として仕上がっていることである。今後はこの結果に満足することなく、さらに幅広く教養を養い、将来、優れた資質を持つ建築家として成長することを期待したい。また授業中、よい創作環境を作り出したクラスメートにも感謝を表したい。

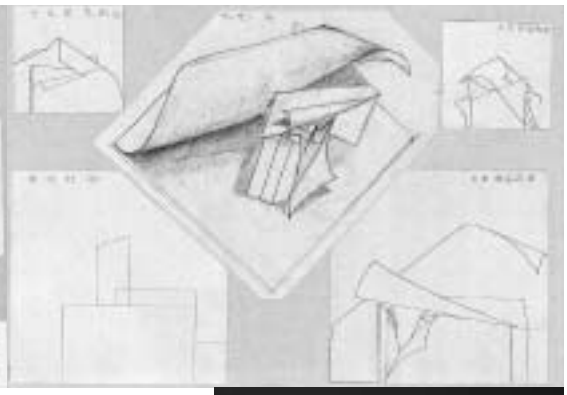
林　美予子

ケント紙に筋をつけ、蛇腹に折っているうちに、これを重ねてみてはどうかと思い、このような形にしました。斜めに切った紙を蛇腹にし、大きさ高さが違う３つの輪にして組み合わせました。中心へいくほど細く高くすることにより、無限に止まることなく、上へ上へ伸びていく様子を表現しました。

指導＝佐藤　直樹

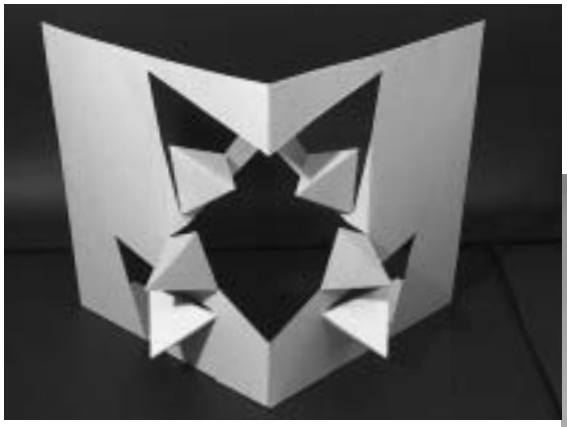
彼女の作品がテーマを明快に表現していることを評価しました。単純につくられたその立体は、ただ紙を丸めて置くのではなく、それに折り目を付けることで垂直性を強調し上昇を想像させ、同一形の連続により発達を想像させるものでした。またデッサンは稜線とそれに囲まれた部分を描くのではなく、ひとつひとつの面に陰影をつけることだけで描かれ、多数あった優秀作品の中でもその完成度は高く、優れた作品になりました。



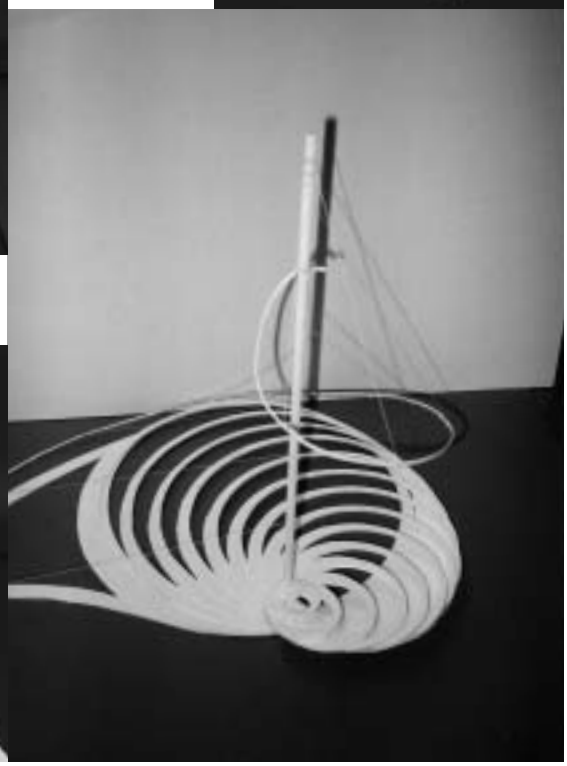


田島　亮子

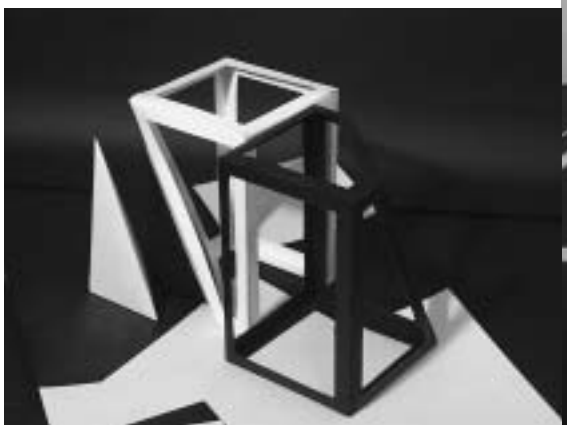
仲田　淳也



三木　良太



堀内　慎一郎



デザイン基礎Ⅰ

第２課題
立体の構成・表現

１年２組

担当：
石田　道孝
宇杉　和夫
佐藤　光彦
横山　聡

田島　亮子
建物という空間の中に入ろうとした人が、力ずくで建物をこじ開け、ねじ曲げて入ろうとしているが入れない。建物は床を突き上げて立っているために床はめくり上げられ、ねじ曲がっている。床が力によってねじ曲げられている様子、人が入ろうと望んでいる空間である建物が力によって床を突き上げてできた新たな空間、また人の力によってねじ曲げられた建物自身を表現するために、素材に曲線的な形を持たせた。

指導＝石田　道孝
空間構成の手法として基本図形の組み合わせ表現が多いなかで、自由曲面を立体のなかに取り込み、基本的な立体との対比を３次元空間として表現している。テーマは力ということであるが、まとまった一つのボリュームのなかで、面が円、平面、曲面、矩形、三角形など様々なデザインに連続的に変化させている。この変化は躍動的ではなく、必然性と滑らかで重い力強さを見事に表現している。この立体の陰影が光とともに複雑に変化する様子は美的であり、立体構成の表現を更に高めている。

仲田　淳也
一枚の紙だけで、紙を少しも切り落とすことなく、折り曲げたり、切り目を入れたりすることで、どれだけ立体感を出せるかに挑戦した作品。また、左右対称にして、材料に色のついた紙を用いたのは、影を際立たせることを目的としている。

指導＝八藤後　猛
評価には、テーマ性、心地よさ、あるいは強い訴えかけといった作品自身が放つ形状への評価と、構成テクニックへの評価といった面がある。この作品は、後者に対して評価されたものである。一枚の紙を切り出して作られたこの作品は単純なものであるが、その作成過程は試行錯誤が伴ったものであり、徐々に完成されたかたちとなっている。
しかし、その技術的なものへの傾倒が、形態をつまらないものにしている点も否めない。むしろどのように対称性を崩し、意外性をアピールできるかがこうした作品へ期待される。ただし、初年度はじめの課題であることを考えれば、今後に期待するものは大きい。

堀内　慎一郎
指導＝八藤後　猛
立体のテーマ性は、形態だけでなく色彩や光のコントラストをうまく駆使することができるかという点も重要である。一見単純な長方形立体を、白と黒といった強いコントラストで対比させ、下地となる基盤にもランダムで不安定な対比をつくって、それら立体に動きをもたせている。当初、単純で安定した形態をいかに崩し、躍動感をもたせるかといったことを課題とし、問いかけていたが、それに答えたものと思われる。

三木　良太
地よりそびえ立つ柱。それにからみつくつる。それを支える天よりのびる白い糸。上部が天で、下部が地。互いに橋をわたそうとするつるを地が柱で、天が糸で支える。絆。つるがそれを象徴するのか。柱が、糸が象徴するのか。はたまた両方なのであろうか……。

指導＝宇杉　和夫
三木君の作品は「建築的」に理解されやすい。支持する柱と支持される床と、それを引っ張って支えつなぐ線によって構成されている。まだ建築のコースに入ったばかりの学生にこのような造形ができることが少しの驚きであると同時に、他の学生にはこのような「建築的な造形」が参考になるとも考えた。しかしこの作品の示しているのは、「垂直と平面」「柱と螺旋」の空間のシンボリズムです。